

列王記下2章1—15節

エフェソの信徒への手紙4章1—7、11—16節

マルコによる福音書6章45—52節

本日の聖書日課の旧約日課は、預言者エリヤとその弟子エリシャの預言者職継承の場面です。エリヤもエリシャも有名な預言者ですが、エリヤは、様々な活動のほか、本日の日課に「彼らが話しながら歩き続けていると、火の戦車と火の馬が二人の間を隔て、エリヤはつむじ風の中を天に上って行った。」(列王下2:11)とある通り、天に上げられたので死んでないと考えられました。そこからエリヤは、イスラエルが困った時に到来して、助けてくれる方という期待がもたれました。イエス様がエリヤに間違われたとあるのは、このためです。一方その弟子エリシャも、エリヤに劣らず偉大な預言者です。「彼らが渡ったとき、エリヤはエリシャに言った。『私があなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何ができるだろうか。何なりと願いなさい。』エリシャが、『どうかあなたの霊の二倍の分け前をくださいますように』と言うと」(列王下2:9)とある通り、エリヤから二倍の霊を受けるのです。その通り多くの奇跡を起こします。水を清めたり、死んだ子を生き返らせたり、20個のパンで100人を満たしたりと、イエス様の奇跡と類似するような奇跡を行った預言者です(歴史的には逆ですが)。

さて、このように模範的な後継者、弟子であるエリシャに比較しますと、マルコ福音書に書かれている弟子たちは、イエス様に対して無理解であり、失敗をする人々です。本日の個所は、先週の五千人の食事の物語からの続きです。その出来事の後、イエス様は「弟子たちを強いて舟に乗せ」(マルコ6:45)ベトサイダに向かわせます。なぜ強いたかという「群衆と別れると、祈るために山へ行かれた」(マルコ6:46)とある通り、一人で祈るためでした。ここはイエス様が祈りを大切にしたこと証し、今日わたしたちが「黙想」と呼ぶことの大切さを示す個所とします。

一方、イエス様と離れた弟子たちは、夕方、逆風で湖の上で立ち往生してしまいます。ガリラヤ湖は琵琶湖の四分の一ぐらいの大きさですから、遠くに水平線が見えるというほど大きくはありませんが、どこにでも簡単に泳いでいけるほど小さくも浅くもありません。暗くなり、逆風で小舟が立ち往生したら、かなり心細いと思います。それだけでも恐怖ですが、イエス様は、どういっておつもりかわかりませんが、「逆風のために弟子たちが漕ぎ悩んでいるのを見て、夜明け頃、湖の上を歩いて弟子たちのところへ行き、そばを通り過ぎようとされた」(マルコ6:48)のでした。マルコ福音書は、『聖書』ですが、ユーモアやアイロニーに満ちているといつも思うのですが、ここもそうです。「通り過ぎて、助けられないんですか?」と思わず問いかけてしまいそうになります。当然、「弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、叫び声を上げ

た。皆はイエスを見ておびえたのである」となります。二千年前にも幽霊の概念があるのも、人間がそれを恐れるのも面白いところですが、「安心しなさい。私だ。恐れることはない」と言われ、船に乗り込むと、風は静まるのでした。最後に、福音書の語り手は、「弟子たちは心の中で非常に驚いた。パンのことを悟らず、心がかたくなになっていたからである」（マルコ 6：51-52）と話を締めくくります。この場所での出来事を、五千人の食事の出来事と結びつけるのです。

お話に描かれた状況で、弟子たちが恐れるのは当然です。イエス様の不在、逆風、暗い湖の上で立ち往生、突然湖の上を歩く未確認生物との遭遇、人間としては恐れおののく条件が整っています。しかし、イエス様は、恐れるなど語り掛けるのです。それは少し無理なことを言っているようにも思えます。しかし、五千人の食事と関連させるからこそ、そこにイエス様の出来事を理解する上で、大切なポイントがあることが分かるのです。それは、人間の常識的感覚・理解では、イエス様の出来事は理解できないということです。

五千人（女性と子どもを同数と考えれば一万五千人）、その人数を十二人ぐらいの食料なんとかしようというのは、常識的に考えて不可能です。そして、不可能だと判断して、何もしなければそれで終わりです。しかし、不可能で終わらせていいのか、その問いかけが新しい行動を生みます。本日の湖の出来事は、出来事の内容は全く異なるのですが、お話にある条件では、湖の上での恐れるのは、当然と言えば当然のようです。その当然の判断が、イエス様をその人だと気づかせなくしてしまいます。当然の恐れが、イエス様から、そして主なる神様から離れていくことに結び付くと語っているのです。少々乱暴な方法ですが、恐ろしいことに出会っても、イエス様を、そして主なる神様を信じていられるか、弟子たちは問われたのでした。

ただし、このお話は、だから強い信仰を持ちなさい、なにも恐れない信仰を持ちなさい、と教えているかという、そうではないと思います。イエス様は、恐れおののく弟子たちに「安心しなさい。私だ。恐れることはない」と語り掛けてくださるからです。イエス様は、弟子たちが恐れることを承知の上で、その弱さも受け入れてくださったのです。何物をも恐れないような人、あるいは間違いを犯さないような人になることも大切です。しかし、このお話が示していることは、たとえ恐れが起きて、そこから何かを失敗したとしても、イエス様がおられることを知った時、新しく正しい道へと導かれるということです。

世界は今混乱の中にあります。人間同士の戦いによる悲しみや恐れは続き、今後拡大する可能性もあります。地震のみならず、大雨など自然災害による恐れもあります。わたしたちをとりまく環境は、本日のお話にある小舟の弟子たち以上に、恐れに満ちているとも言えます。しかし、だからこそ、わたしたちはイエス様がおられることに気づくとき、恐れから安心へと変わることを、『聖書』は語っていると、わたし自身も心から信じ、これからも教会から伝え続けたいと思います。そして、そこからまことの平和が実現することを信じ続けたいと思います。